

人間社会環境研究

第 43 号

林京子の語りの原風景
——『ミッシェルの口紅』の上海

宋 焯

2022年3月

金沢大学大学院人間社会環境研究科

林京子の語りの原風景 ——『ミッシェルの口紅』の上海

人間社会環境研究科 人間社会環境専攻
宋 炜

Archetypal Landscape of Hayashi Kyoko's Story: Shanghai in *Michel's Lipstick*

Division of Human and Socio-Environmental Studies
Graduate School of Human and Socio-Environmental Studies

SONG WEI

Abstract

Although Hayashi Kyoko is regarded as a writer who depicts the experience of atomic bombing in Nagasaki, Shanghai in wartime also constitutes an important theme in her literary creation. Hayashi's life in Shanghai, China until she was 14 years old is one of her "roots of life" and "origin." *Michel's Lipstick* collects seven short stories that record the Shanghai experience. It is read as a bildungsroman, or war novel. The tone of the story has been debated; however, there is also a tendency to positively describe the Shanghai depicted in the work. To understand the writer's understanding of this period in Shanghai, this article attempts to consider Hayashi's realistic narrative style, analyze the scenery of Shanghai in war and the lives of the inhabitants depicted in *Michel's Lipstick*, and clarify her view of life and death, home, and humanism in her literary practices. Finally, this article attempts to understand Hayashi from the perspective of repatriation literature.

Keyword

Hayashi Kyoko, The Shanghai experience, View of Life and Death, View of Home, Humanism

林京子の語りの原風景——『ミッシェルの口紅』の上海

人間社会環境研究科 人間社会環境学専攻

宋 焯

要旨

林京子は一般的に長崎被爆体験を描いた作家と理解されているが、戦時下の上海も林の文学創作の重要なテーマだ。十四歳まで中国の上海で過ごした人生は林の「命の根」の一つであり、「作家・林京子の原点」でもある。『ミッシェルの口紅』は上海体験を想起して記録する短編集だ。今までの研究はこの作品を教養小説や戦争小説として読んでいるが、作中の上海時代の庶民生活に対する語りの基調をめぐって論争が行われ、しかも作品に描かれている上海時代のありようを肯定的に評価される傾向がある。作家の上海時代に対する本当の認識を理解するために、本論では、林の即物的ともいえる語り方を考えながら、作品『ミッシェルの口紅』に書かれた戦時下の上海における風土・風景と庶民の生活の表象を分析して、林の文学実践における生死観、故郷観そして「ヒューマニズム」を明らかにする。また、引揚文学の側面から林を捉えようとする。

キーワード

林京子、上海体験、生死観、故郷観、ヒューマニズム

はじめに

林京子（一九三〇～二〇一七）は一般的に長崎被爆体験を描いた作家と理解されている。しかし、十四年間の少女時代を過ごした戦時下の上海も、林の文学創作における重要なテーマとなっている。「上海」は、島村輝氏と林が対談「被爆を生き延びて―作品と生涯を語る―」（二〇一一）で使った「作家・林京子の原点」¹⁾が言うように、林京子にとって重要な意味を持つ。ここでの「上海」はただの地理的座標の意味での「上海」ではなく、林が十四歳までの少女時代を過ごした上海時代という時間的な意味を持つ。この上海時代²⁾「作家・林京子の原点」という認識は、林の社会文学会の一九八七年度秋季大会での講演「上海と八月九日と私」に遡ることができる。

まず私の命の根ですけれど、一つは私の父と母から貰いました母体としての生命と考えております。これは零歳から十四歳まで、長崎の被爆の時までになります。この間ずっと十四年間、ほとんど上海で生活をしておりまして上海時代ということになります。これは、両親ときよういただいたと、中国の方には申し訳ありませんけれども、私個人としては平穏で楽しい上海時代でした。あと一つの命の根は申すまでもありませんが、八月九日の被爆を母体にした命の根です。これはもちろん、長崎と切っても切れない関係にあります。

す。上海時代は、私の人生の中心にあった陽の当たる場所といたします。すなわちプラスの時代ということが言えますけれども、八月九日以降の私の命はプラスに対してマイナスの時代ということになります。私の人生の中心にあるのを上海時代とすると、その端っこにある時代ということが出来ます。作品も必然的に、上海時代と長崎の八月九日からの時代に分かれてしまいます。²⁾

以上の講演から、上海と被爆は林の二つの「命の根」であることが分かる。上海で過ごした時代は被爆した後の人生と比べると「陽の当たる」プラスの時代だと感じている。ただし、八月九日以降の人生がひたすらに「マイナス」だったこととは違って、上海時代はむしろ場合によって「中心にあ」ったり「端っこにあ」ったりする。林の文学実践はこういう「根」から芽を出すものだから、こうした上海を基礎的風景として成立した作品における語りのあり方は、必ずしも肯定的とばかりは言えない。

『ミッシェルの口紅』（中央公論社、一九八〇）は林京子が自らの上海時代をテーマとして創作した初の作品集だ。ここには七八年の日中平和友好条約の調印を契機に、七九年一月から十一月にかけて雑誌『海』に連載された「老婆の路地」「群がる街」「はなのなかの道」「黄浦江」「耕地」「ミッシェルの口紅」と、同年十二月に『婦人公論』に発表された「映写幕」の七編が収録されている。いずれも一人称「私」が少女時代の上海体験を想起して描く作品だ。ただし、「映写幕」だけは引き揚げ後の諫早市の映画館で上海時代の知り合いに邂逅したことを契機に、被爆後の少女が上海生活を回想する内容となっている。上海の記憶に基づく作品には、林京子の上海に対する態度が集中的に見られる。

しかし今までの研究において、作中の上海時代の庶民生活に対する語りの基調をめぐって、次のような論争が行われてきた。川西政明氏

は『ミッシェルの口紅』の世界には「父と母の子供として無垢な『私』がいた。無垢とは壊してはならないものを暗示する。そのように生きた場所が上海だったのである。林京子にとって、上海は壊してはならない生を刻んだ場所なのだ³⁾」と評価している。対して、黒古一夫氏は川西の評価は余りに「情緒的・美的」に傾いたと反対し、戦乱と死が多く描かれている『ミッシェルの口紅』の世界では、むしろ「恒常的な『危険』・戦乱」状態の合間に平穏な日々が挟まれていた⁴⁾と言ったほうが適切だと指摘している。一方、黒古氏は林のインタナショナルな面を説明するために、「私」一家と老婆一家の関係を「平等・対等」の「信頼関係」と評価している⁵⁾が、熊芳氏は、それはむしろ「支配側と被支配側」、「侵略側と被侵略側」の關係に過ぎない⁶⁾と分析している。

川西政明氏の解説より、黒古一夫氏の「恒常的な『危険』・戦乱」状態の合間に平穏な日々が挟まれていた」という理解は客観的だが、熊芳氏によって「支配側」におけると指摘される母を「対等・平等」と評価するのは楽観しすぎだろう。『ミッシェルの口紅』を肯定的に評価しようとしたかもしれないが、上海時代の出来事はいいかどうかとは別に、それらの出来事を林がどう見るかが要となる。そのため、上海時代に対する林の態度をさらに解明すべき余地が残されていると思う。注意すべきことは、林にとって、上海時代の「プラス」は被爆後の「マイナス」と比べての「プラス」だということだ。そのため、上海時代を人生の「プラス」の部分と考えることは、上海時代を「プラス」に描くことと同一ではないという事実を念頭に置くべきだろう。

それでは、上海は彼女にとっていったいどのような場所だろうか。上海は林によってどのように表現されているのだろうか。上海はどのように林の語りに影響を与えたのだろうか。これを明らかにするため、本論では、林の語り方に注目しながら、短編集『ミッシェルの口紅』に書かれた戦時下の上海における風土・風景と庶民の生活の表象

を分析して、林の生死観、故郷観として「ヒューマニズム」を検討する。また、『ミッシェルの口紅』は「成長していく少女を主人公にした教養小説の一変種」或いは「戦争文学」として読まれている⁷⁾が、本研究では、引揚者としての作者の語りにも注目し、引揚文学の側面から林を捉えたい。

「ありのまま」に書くこと

『ミッシェルの口紅』の創作方法について、林は「子供の目で、ありのまま書く⁸⁾と述べている。「ありのまま書く」とは「叙情的な言葉は一切避けようと思っ⁹⁾て書くことであり、「余分な贅肉」のない「きりきりにやせた言葉で、味もそっけもない¹⁰⁾言葉で書くことだとも述べている。この「やせた」という表現は林自らの説明では「私の記憶」であるが「記録であろうとした」という意味もある¹¹⁾。つまり、情緒的な表現を意図的に避け、是非善悪の価値判断や想像を挟まずに上海体験の記憶を記録する意図がある。

しかし、林の「子供の目で、ありのまま書く」という語りの志向性とズレる部分がある。熊芳氏は「映写幕」を分析し、「母の視線」などの「他者の視線」の介入が見られることから、作品に「重層的な視線」¹²⁾が存在することは見逃せないと指摘している。実際に、「重層的な視線」は「私」という人称の分裂からも見られる。つまり、一人称「私」は子どもの「私」と作品を書く時点の「私」に分けられるからだ。例えば、「最近、地名と方角を正確に知るために、旧上海の地図を調べていたら、意外な発見をした。八字橋の川と虹口クリークが、曲がりくねりながらつながっていたのである。(中略)都会の生活に組み込まれたクリークと、雨水の流れが土地を削って作った自然河川が一本だと知ったとき、私は改めて、虹口地区が中国大陸の一部であったのを知らされた」(「耕地」)が示すように、作品を書く時点

での「私」の意識が作品に強く介在している。地図を調べる「私」は語り手の「私」だが、子どもの「私」は語り手の視点とその「私」に移入されるものだ。両者の視点はそれぞれ一人称視点と三人称視点となるから、語り手の「私」と上海時代の「私」とは距離を取っている。しかし、この距離感は作者の態度を曖昧にする。

また、「ありのまま」の語りは一見すると中立的で客観的だが、テキストを細かく読み込んでいくと、必ずしもそうではない面が見られる。即ち、林が距離をとり、記録する対象から独立した客観的な立場を獲得するほど、記録する対象への告発の視線が強くなる。また反対に、「子どもである私に、国や民族の意識があったわけではないが、長崎に逃げて帰る以前よりも、内地を思う度合いは深くなっていた」(「老太婆の路地」)というような表現も見られる。子どもの「私」が長崎の土と日本人に親しみを持つのは想像できるが、わざわざ「国や民族の意識があったわけではない」と語るのには弁解を急ぐ感じがある。成年後の林が上海時代に対処するとき、国と民族は気になるだろう。大人になった林は、戦時以来の日中関係を気にして上海時代に対する肯定的な思いを直接に語ることを避けたが、作中において、「国や民族の意識があったわけではない」子どもとして上海を懐かしむ立場を獲得すると考えている。つまり、上海時代に対する弁解と自省の正反対の語りが生じた。そのため、林は叙情性がそぎ落とされた言葉で「ありのまま書く」ことに徹したのだ。他人事を述べるような態度をもって、偏りすぎない事実の語りを求めたのだ。

黄浦江と生死観、そして即物的な語り

上海時代の生と死のあり方とは何か。それはどのように林の生死観と言葉に影響したか。具体的に確認していく。『ミッシェルの口紅』では、黄浦江は「私」の生活の場を構成する重要な部分であり、「生

と死」が絡み合っている場でもある。作品集では、黄浦江に関する描写は数多く登場する。

①私は、河に面した窓を開けた。春先の、水気を含んだ柔らかい風が吹き込んで、窓一面に黄色い水をたたえた黄浦江が広がった。駆け寄って来た妹が、うあ、と河を見て叫んだ。窓からみおろす黄浦江は、ワンポウツォの上から見た時よりも雄大で、うねって迫ってくる。それに反して河を上っていくジャンクは、河の上で小さく見える。帰ってきた、と私は思った。
〔老太婆の路地〕

②秋風が吹きはじめて、黄浦江は、真夏の黄色い濁りからうぐいす色に変わっていた。
〔はなのなかの道〕

③黄浦江は季節によって水の色を変える。晴れ上がった青空、灰色の雨雲にあわせた時々の変化もあるが、四季にあわせて濃い土色に濁ったり、うぐいす色に澄んだり、おおまかな移りをみせる。黄浦江の水の色から、私は四季の移りを逆に感じとるが、自然は持ちつ持たれつで、気づかないうちに、そこに住む人の肌の色まで変えてしまう。白色人種も、黄浦江の水を飲んでいるうちに、河に似せた黄土の肌になる。
〔黄浦江〕

「私」はよく三階にある子ども部屋の窓から黄浦江を眺める。①は「私」が長崎から上海に戻ってきて、部屋から黄浦江を眺めるシーンだ。広がっている黄色い水面は三階から見下ろすと更に雄大に見える。水気を含む空気を吸い、流れている黄浦江の水を見て、「私」は「帰ってきた」と心の中で言った。生活の一部分となる黄浦江に対して「私」は親しい感情を抱えている。黄浦江の色、匂い、吹かれてきた水気、遠近の感覚に対する描写は視覚、嗅覚、触覚を働かせている。

これによって、黄浦江は眺められる風景だけではなく、身体で感じられる実在の環境であり、身体の記憶を呼び覚まされる生活の場所でもある。「私」の身体と黄浦江が構成する場所と連結を結ぶことで、「私」は自分の居場所を確認でき、所属感を生み出している。

②と③では四季の移りによって黄浦江が水の色を変えることを細やかに描写している。近代以来、村松梢風、横光利一、芥川龍之介などの作家が上海の地を踏み、「魔都」上海の様々な面を描いているが、林京子ほど黄浦江を細かく観察して描いた作者はいないだろう。黄浦江の側に暮らした長い年月で、天気と季節の移りによる水の色の大まかな変化は、「私」が感知した上海の四季をなしていた。また、黄浦江は上海の人々の水源地だ。その水を飲む人々は人種を問わず、「黄土の肌になる」。肌に影響する気候風土の描写は、人が上海の自然の一部になったことを秘める。以上の黄浦江の描写は、「私」と黄浦江の身体的な関係性を表している。その関係性は「還ってきた」という素朴な帰属感に繋がっていく。

このように、黄浦江など上海の風土は林の言葉と常識の基礎となると言える。「私の日本語の原風景としてあるのは、中国大陸です」¹³⁾と林京子は何度も告白している¹⁴⁾。大谷華氏が指摘するように、「原風景」は「子ども時代の体験をもとにした生成の物語として現れている。その語りの場で生成されている物語は、自己アイデンティティ・場所アイデンティティの表れ」¹⁵⁾だ。『ミッシェルの口紅』では、子どもの「私」が黄浦江で身体的な体験とそれによる情動的な体験をする。これらの経験を語ることで、自分なりの文脈が形成され、黄浦江は「私」にとって意味のある場所として記録される。つまり、上海の風土は林の常識と言葉と価値観の基礎となる。

黄浦江は林によって多重の意味を持っている。黄浦江は生きるための水源を提供する他に、明らかに死と深く関わっている。黄浦江の水面には時々死体が漂っている。子ども部屋の窓から、「私」はよく雨

の飛沫で泡だつて見える水死体を眺めている。その水死体には、他のところからながられてきたものもあるが、川岸で処刑されて水中に倒れたものもある。林は文中で軍属と自称する梶山の目線を通して、遺体が黄浦江の水中に漂っている場面を描いている。「ごみに混ざって」流れてきた死体が「潮の具合」で、「岸壁に打ち寄せられてくる」。それは「処刑」の日に限った「風景」ではなく、日常的に見られることだ（「はなのなかの道」）。

この眼差しは梶山からのものでありながらも、そうした「風景」を見慣れて育てられてきた当時の人々のそれと合致している部分がある。七五年の野呂邦暢との対談で、林は死体のことを以下のように語った。

自然の物としてしか見てなかったような気がします。赤ちゃんが死んでも道に捨てますし、それは、親より先に死んだ子の不幸ということと、大地に還るということと、親以外の誰かが、その子を持つていつて埋葬してくれると、次にいい子が生まれるというような言い伝えがあるらしんです。¹⁶⁾

（対談 昭和二〇年八月九日）

人の死も死体も「自然の物」で、「大地に還る」ことで次の「生」の降臨と繋がっていくという上海時代の生死観は、こうした中国人の言い伝えと、戦時下の上海の黄浦江や道々で見慣れた死の「風景」からなしたものだ。

そうした生死観は『ミッシェルの口紅』における死の語り方から見られる。短編「耕地」では、小学生の「私」が上海郊外に遠足したとき、昔の陣地に晒された頭骨を見ながら「骨に肉付けをして、生前の姿を想像」した。そして、「生命を失うと同時に、人は臭気も徐々に消して、土に同化していく」と語った。「夢をみるわよ」と「無邪気に死者たちを怖れ」た母は、「死人」という言葉を情緒的に思うのに対して、

死と死体について、語り手の「私」は冷静な目をもって、自然の物質的転換の一環として即物的に語っている。

前述したように、黄浦江の生と死の絡み合いは重層的な意味を持っている。まず、黄浦江は生活の場で、生のための飲用水を提供する水源で、死体を葬る死の場所でもある。そして、黄浦江は生きている者と死者を自然に包み込む場所でもある。上海で見られるこれらの原風景は、子どもの「私」のアイデンティティと生死観の成立に影響を与える。子どもが上海の死風景を無頓着に眺め、死体を「自然の物」として認めることは、戦争が子どもを歪める結果にほかならない。子どもを自然を通して即物的に死を書くのは、林は「戦争がもたらす死を自然の循環といった了解」¹⁷⁾を有していたからだというより、むしろ子どもが死を自然と見る不気味をもつて、そうしたことをさせた戦争を批判するからだといったほうがいい。しかも戦争が人間を歪めることは大人の世界ではより明らかに見える。

生の降格—剥き出しの生

短編「はなのなかの道」では、中国人が日本兵に「処刑」されるとき、傍観していた軍属の梶山という日本人の若者が日本兵から刀をもらって辻斬りで人を殺したというエピソードが書かれている。

その頃、虹口の街を連日、後ろ手に縛られた中国人たちがひきたてられていったという。スパイ、スパイ容疑者、便衣隊と嫌疑はいろいろである。嫌疑なのか、既に判決を受けた人たちなのか、中国人たちは処刑場になっている波止場に連れていかれる。特定の処刑場はなく、黄浦江に沿った川岸の随所が処刑場になった。川岸が選ばれた理由は、遺体の処理がいらぬからである。

スパイや便衣隊と言われた中国人たちが縛られて黄浦江まで引き立てられ、川岸に沿って並んで斬り捨てられてゆく。こうした光景は牛たちが列にして屠場に追われて屠殺されるシーンへと容易に接合される。「黄浦江」では、通学路で、時々牛と豚の群れに出会うことがある。列を並んでいた牛と豚は僅かのクローリーたちの鞭に従い、鳴きながら、クローリー沿いの屠場に向かって通りを走っていった。列になって屠場に追われて屠殺される牛たちと、波止場に連れていかれて、黄浦江に沿って斬られた中国人たちの姿は重なりあっている。牛も中国人も牛殺しや日本軍の手で自由に処置される肉体にすぎない。両方は「合理的」に殺され、要らない部分（牛は血、人間はその全部）が捨てられ、最終的に黄浦江の一部になる。それほど差がない人間と牛の死に方を語ると同時に、「死」が日常的に当時の上海にあることを印象付けると同時に、上海時代の中国人の生が動物の生のように扱われたという事実を静かに示している。

なぜ人間の生はこのように動物の生に降格されるのか。原佑介氏は日本人の植民地体験を主題とする植民者文学に共通する特徴として、「植民地体制」というものは、支配者たちが被支配者たちを自分と同じ人間のように認識しないことが前提になっている¹⁸⁾から、植民者にとつて被植民者は「風物の一部」と見なすような「遠い存在」だという認識が、多くの引揚者の回想記に見られると述べている¹⁸⁾。

まず明確にすべき基本的な前提がある。人間の全ての権利を実際に規定し保障することは、法律の意志に基づくのだ。人間の実質的な権力は法律の内容に載せられることによって国家の意志の一部に上昇する。公民という言葉は国家の延長線にあり、国家があつてから公民があるということ、公民が人間として国家に政治的に受け入れられるのは、公民個人の権利が国家の法律の一部となることを前提としている。国家がなければ公民はなく、法律がなければ公民はないと言ってもいい。ミシェル・フーコーが七五年に出版した『監獄の誕生 監

視と処罰』の中で「生政治 (Biopolitique)」という言葉を使って、人間の生と法律の弁証法的な関係を解釈した。人間の生が政治化された後、政治化された生の権利は法律によって保障され、解釈されることによって国家の一部となる。人の生が法律によって意味を与えられていないとき、国と国の境界、法律と法律のはずれにあるとき、それはジョルジョ・アガンベンが『ホモ・サケル』において提出する「剥ぎ出しの生 (bare vida)」として捉えることができる。つまり、現実政治が生の意味を剥奪するとき、人間の生は保護のない生物学的生に降格してしまう。

中国は近代（概ね一八四〇年のアヘン戦争から一九四九年の中華人民共和国の成立まで）に半植民地半封建社会に陥った。近代の上海は近代の中国の縮図だと言える。中国の諸矛盾の焦点だった当時の上海は戦争を被った直接の戦地で、欧米列強の侵略や中国人の革命闘争などを含む様々な勢力の陣地で、莫大な財産と飢饉が共存した近代化の先駆けともなった都市でもある。一九四二年六月の呉淞戦役で南京条約が調印され、上海が広州、福州、厦門、寧波とともに開港された。

一八四五年、第一回土地章程の制定によって具体的な居留地が上海に登場した。領事や外商たちは直接に中国人から土地を買い、自国の干渉抜きに租界を建設したことから、一般的な植民地と区別して半植民地と認められている。その後、上海は租界の拡張と第一次世界大戦後の帝国の権益がシャッフルを経て、一九三七年に日中戦争が勃発した。第二次上海事変では日本軍が中国軍を撃破して、租界を除く上海全域を占領した。太平洋戦争勃発後、日本が英米に宣戦布告し、日本軍が租界に攻め入り、四五五年の無条件降伏に至るまで上海全域を占領していた。このように、近代の上海は完全な植民地ではないながら「国の国」のような地域として、中華民国の管轄権がそこに及ばない状態だった。

こうした歴史は現代でも欧米様式の建物から容易に理解できる。代

表的なのは外灘だろう。外灘は「上海バンド」ともいう。バンドは元々「築堤」を意味する言葉だが、イギリスはそれをもってイギリスが築かれた港湾居留地の特有のウォーターフロント空間を言うようになった。南のバンドから北の虹口まで、旧大英帝国総領事館、旧ロシア総領事館と旧大日本帝国総領事館などが建っていて、フランス、アメリカ、イギリス、ロシア、日本、万国の国旗と軍艦旗が翻っていた。上海における中国側の主権の喪失による景観上の異化と考える。石田仁志氏が指摘するように、当時の上海は「共同租界地であるという点では、中国人にとっても（異郷）であつたと言える」¹⁹⁾。戦争や半植民地によって、上海は当時の中国人にとつての「故郷」ながら「異郷」という特異な空間になってしまふ。上海が近代という特別な歴史的時期によって生じた中国にあつて中国ではない空間として広く認識されている理由もここにある。

しかし一方、上海では、支配者だつた西洋人と彼らに築かれてきた「擬似西洋空間」²⁰⁾の裏に、中国人の生活の流れが歴史を貫く。一八五三年小刀会の一揆が勃発し、富を持っていた人たちは最初に租界に避難した。のち一九一〇年代、辛亥革命と第一次世界大戦などによる社会不安で、家を失つた難民が大勢租界に逃げ込んだ。一九四五年までの間に、上海の人口は三百三十万人を超えるに至つた。難民の流入は租界の発展に必要な巨大な労働力を提供した。彼らは納税し、上海・租界の建設及び社会の円滑化に重要な役割を立つたため、コミュニティにとつて不可欠な一部となつていた。しかし、租界の国々と後の日本が実際にコントロールした「独立王国」のような上海は清国政府、国民政府の主権が届かない場所である。彼らは清国、中華民国の国民として国に保護されない、もちろん上海を実際にコントロールした国々の国民として認められてもいない。つまり、社会生活の中で義務を履行しながらも、法的保護の外に投げ出されていた彼らは、上海の社会生活の内部に包含されながらも異類として外部に排除され

るといふパラドックスのような存在になつてしまふ。

中国人を斬ることは極普通なことだ、特に「スパイ」と言われる中国人を斬ることは日本側の利益によって正当視された。「はなのなかの道」で、梶山は辻斬りで目の前の中国人の男を殺した。男の死体は黄浦江に転がった。梶山は流れついた死体を「みても驚かなかつた」。彼にとつて人間の死体は、「犬や猫の死体と変わらなかつた」のだ。牛の死体が都市に肉食を提供するのと違い、人間の死体そのものは全く意味のないものだ。それでも中国人を殺す意味とは、「スパイ」の「処刑」と名付ける「正当的」な殺人を通して日本側の権力を可視化するということだ。まとめると、日本占領下の上海に暮らした中国人は庶民生活をもって日常的な社会生活に包含されたが、非国民のための法的権利を与えられない。彼らは法律に権利を保障されないばかりでなく、日本の権力を明らかにするために法的に殺されるのだ。

国と故郷を奪われた上海の中国人たちは生物学的な生という最も単純な存在の形に還元された。そして、侵略者の権力の下に、いつか意味のない死体となる肉体になつた。政治的、生物的に排除された「中国人」は三百万という数を有する顔のない記号に抽象化することができ。それらの「中国人」の生は本質のない剥ぎ出しの生になつたのだ。個をなくして顔のない政治的共同体の生は、人を自然に殺す原因であるだろう。個の生に注目することによつてはじめて、人間の生を取り戻すことができるようになる。短編「はなのなかの道」で梶山は殺人した翌日、「人を殺した恐怖にかられた」。普段のように碼頭の岸壁を歩いていた時、彼は自分が切り捨てた男の遺体に気付いた。

見覚えのある継ぎがあつた服の背をふくらませて、遺体は、水中に首を垂れて伏せている。朝の陽のなかで揺れている遺体をみて、梶山は岸壁に釘付けになつた。継ぎがあつた服は、男の生前の日常を、如実に語っている。犬や猫と同等にみようとしてみても、丹念に

あてられた継ぎは、ごみのなかから浮き出てくる。梶山は、思わず手を合わせたという。

それまではゴミに混ざった死体を日常の「風景」として無頓着に見、人間の死体も動物の死体と同一視していた梶山は、初めて人の死を実感するようになった。服にあたった継ぎは斬られた人が生前しっかりと生活を営んでいたことを示している。それを見た梶山は、人を殺した恐怖と懺悔の念が生じるようになった。「中国人」という普遍性の記号を外した、具体的な個の生に向かっているとき、相手が自分と同じ人間だということに気づいたのだ。

林京子は平板といつてよいほど飾りのない言葉で黄浦江の川岸での中国人の処刑を叙述したが、それは日本占領下の上海に住んでいた中国人は人間として扱わないという本質的な問題を明確に語っていてもいいた。しかし、林が優れたところは彼女の語りはそこで止まらないということだ。日本の戦後文学の中で、日本の植民地や占領地の問題を反映する作品は多い。しかし吉見義明氏が指摘するように、中国戦線における日本人の中国体験・敗戦体験の語りは、「赤裸々な侵略戦争」を事実上に示しても、「聖戦」を信じ、「大東亜共栄圏」の確立²¹や「自衛」のためと信じて戦い続ける間は、その事実が見えてこなかった²¹という特徴がある。このような作品は客観的に侵略戦争の本質を表したが、作者自身がその本質を指摘する本意をもって書くわけではない。林の場合は、むしろそういう日本人の本意ではない部分を自覚した。「犬や猫と同等にみようと」するという梶山の心理を語ることで、あえて事実を無視しようとする日本民衆の心理状態を暴き出した。そして、林は具体的な個と個の生の繋がりを通してその降格された生の本来の意味を取り戻すことを試みた。これこそが林文学の特質で、そのヒューマニズムの所在でもあると考える。

なぜ林の描く梶山は個の生に向かうことができ、恐怖と懺悔を生み

出すことができたのか。それは恐らく林の中国人と長い間に混ざって暮らした経験と関係が深い。吉見義明氏の研究によると、「占領地にいる中国民衆と密接な交流の機会を持った」日本人の場合は、自らの行為に対する「反省」が見られる²²。その特徴は、「ミッシェルの口紅」における中国人との路地生活からも見られる。

少国民の路地生活

父・宮崎宮治の転勤のため、御包みに包まれた生後八ヶ月の林京子（本名宮崎京子）は一九三一年に上海に移住した。三二年の第一次上海事変と三七年の第二次上海事変という二回の戦禍でふるさとの長崎に疎開したことを除き、四五年二月末の長崎への引き揚げまで、ほぼ十四年の歳月の殆どを、林は中国の上海で過ごした。林の家族は虹口の密勒路^{ミッセル}に赤煉瓦の三階建ての家を借りて住んでいた。密勒路は「住人の九割が中国人だった」²³。「ミッシェルの口紅」では、路地に住んでいた「私」は中国人と密接に繋がっている。毎朝、路地の女たちがモートン（中国独特の便器）を洗う音と匂いととも、一日が始まる。「私」の家と一番親しく付き合っていた路地の中国人は大家の老婆の一家だ。「私」はよく老婆の小間使いの明静と一緒に遊んだ。「抗日」の「私」はよく老婆の小間使いの明静と一緒に遊んだ。「抗日」の「私」はよく老婆の小間使いの明静と一緒に遊んだ。中国の遊びをする。しかし、口争いになると「東条ワレシ（悪い）」「蒋介石ワレシ」と互いに言い返す。民間レベルの支え合いを行いながらも、国家レベルの立場に立つと、対立の関係がすぐ表明されるのだ。「個人の名前はあまり意味を持たない」、名前より「まず国籍から明かす」²⁴のが習慣だった上海では、国家レベルの立場を日常的に意識して暮らしを送る意識は、子どもにも影響が及んでいた。路地の子どもはまだ戦争の意味をわきまえていないかもしれないが、自分がどの陣営に属するかについては曖昧な認識を持つ。

「老太婆の路地」には次のようなシーンが描かれている。「私」が明静と一緒に虹口マーケットから帰る途中で、時限爆弾爆発事件があつて、通行止めになった。「明静は唇を半ばひらき、無表情な目をして網の前に立っていた。待つのがあたりまえだと明静はあきらめているようだった」。それと反対に、「私は、目の前に仁王立ち担っている兵隊の目を見つめた。……私は、兵隊の目を見ながら、日本人の子供です、と相手にわかるように首をかしげてみせた」。兵隊は「日本人の子供か、通つてよし、と叫んだ。私は、すかさず網をくぐり抜けた。通行人のいない道を、パンの袋を抱いて走つた。誰もいない広い道を、特別に許されて走る快感が私にはあつた」。走りながら「私」は振り返つた。後ろには「中国人たちの黒い目が、蜂の巣のように重なりあつて、私一人にそそがれていた。ふと私は、ワンポウツォで通り抜けた日の、土囊の銃撃の跡を思い出した」。その時の明静は、「無表情な目で、道の向こうから私を見ている。私は、明静を置いて、走つて家に帰つた」。夕暮れ時、明静が帰つてきた。「パンを抱いて路地を通る明静に、ウエイ、と笑顔で私は呼びかけた。明静が、チュツと唇をすぼめて、唾を吐いてみせた」。ここでは、「私」に関して、日本兵隊は味方だという認識、少国民として優越感を持つて描き出された。明静に関して、被支配者としての従順の裡に、日本人への憎しみが積み重ねられていることが描き出された。

日本兵隊に囲まれたとき、日本人の自分が兵士にいじめられることはないことと知つていた「私」は積極的に彼らに助けを求めた。子どもの「私」の日本人である帰属感強い。即ち、「私」の認識の中で、日本人の子どもの「私」は日本兵士とは味方だから、戒厳令の対象者ではない。それに、「私」は日本人の子どもであるから日本兵が通過させた。こうした特別な権利は「私」が日本の少国民、植民二世であるからこそその優越性で、年齢と男女を問わず、日本人であるだけで獲得できる特権だ。「快感」を抱いて走つていた「私」は確かにこの特権を享受

し得り、そしてこの特権を楽しんでいたに違いない。この中国人を凌駕する支配者が有する特権は些細なことでも、「私」を喜ばせた。

日本人の優越感について、四〇年五月、日本の大本営陸軍部研究室が中国在留日本人の動向を調査しまとめた「海外地邦人の言動より観たる国民教育資料(案)」では次のように述べている。中国に流入した日本人は中国人に対して「徒ラニ誤レル優越感ニ基キ中国人ニ対シ侮蔑的行為ヲナシ其の反感ヲ買ヒアルモノ少カラ」ざる状況で、彼らの大部分は、中国人に対して「敗戦者、被征服者ナリトノ偏見ヲ以テ彼等ヲ侮蔑シ且傲慢不遜」にした²⁵⁾。しかし研究班自身も、中国人を「劣等国民」「敗戦国民」とみなしており、従つて「文化的〔に〕優秀なる日本人が、中国人の上に立つて「指導的立場に於て」彼らと「協力」すべきだ、と信じていたから、「聖戦目的」を「正しく理解」しても事態はさほど変わらなかつた」と吉見義明氏は皮肉を述べている²⁶⁾。中国に対する日本人の優越感の源は、日本の占領による中国の主権の破壊によつて、中国人の生が生物学的な生に降格するということで、日本文化や「聖戦目的」と関係はない。けれども、調査班の報告から、中国人に対する日本人の優越感は上から下まで日本人の間に存在して、戦時の日本人の普遍的な性格となつていく状況を確認することができる。

こう考えると、日本が上海を侵略し占領した後には構築したシステムの中で、中国人と日本人との交流には真の「平等・対等」は存在してない。日常生活の中で「平等・対等」に見える両者の交流も、日本側の優越性を保つことを前提とするものにはすぎない。逆に、「不平等」は日常生活の中で繰り返され、強化されつつあり、知らず知らずのうちに内面化された。

一方、もう一種の「あたりまえ」(「老太婆の路地」は中国人の中に形成した。「私」は機敏な目で助けを求めたが、明静は「無表情な目」をして通過の許可を待った。明静は中国人たちの一つの縮図と考

えてもよからう。日本兵隊のコントロールの下、抵抗を断念するほかない人たちは子羊のように日本兵隊に左右された。主体性を失い、被支配者に置かれる立場とそれなりの消極的な行動は「あたりまえ」に内面化されたのだ。ただし、実際に存在している人間である以上、その中国人たちは外部の刺激に対して反応がないはずがない。「土囊の銃撃の跡」のように、戦争の破壊は中国人に傷を残した。戦争や圧迫への反応は、消極的に抑えられても、無感動の顔と無表情な目の後ろに潜んでいる日本人への憎しみが積み重ねられてきた。そのため、「私」が笑顔をしながらさりげなく明静に呼びかけてみると、罵声しか得なかったのだ。

林京子は「私」の目を通して見、「私」の心を通して感じるが、この淡々と述べている語りは、「私」と語り手の間に距離感を作り、もう一人の「私」が子どもの「私」を凝視する自省の感覚を作り出している。この凝視は、日本の侵略と植民下の日中間関係に対する一方的な美化を打ち破る可能性を秘めている。「平等・対等」と正反対に、「私」が代表する日本植民者は日本兵隊と同じ陣営に属し、その力を借りて優越的な待遇を獲得して、支配者の自己認識を内面化する。明静が代表する中国人は戦争の中で主体性が奪われた被支配者に強いいられたが、個の人としてはそれぞれ怒りと憎しみを胸いっぱい蓄えた。そのため、戦時中の上海では、日本植民者と中国人の間には真の友情がない。一緒に遊んだり、互いに助け合ったりする表面の裏側に、上海の日本人と中国人の支配者被支配者の立場及び圧迫と抵抗の関係が現れる。友好や無感覚な顔に覆われて、それらの対立はそれほど激しい表現ではないかもしれないが、日常生活の隅々に浸透し、非常に日常的な形式で表れていた。

その対立の日常があるため、林が少女時代を追憶する際にはその問題を無視できない。そのため、以下の二点が描き出される。まず、中国人と日本人との調和のできない対立は、具体の中国人との付き合い

の中で察知したものだ。両国の庶民の交わりと対立が交錯した生活は林の少女時代の原風景になり、林の自伝的な作品が語られる内容を決める。そして、上海時代の原風景から得た植民者意識に対する自覚と自省は、同じ原風景から生えた上海への「郷愁」と矛盾する。それは作中における林の叙情性が極めて抑えられている重要な原因の一つになると思う。

一九九七年、再び上海に旅にできた林はかつて暮らした路地の入口に立ち、明静に「東洋鬼と唾をかけ」られるかもしれないと恐れて、路地に入らなかつた²⁷⁾。その八年後の二〇〇五年、林はようやく『全集』の「あとがき」で「侵略国の民であった私には、許されない郷愁だった²⁸⁾という結論を吐露した。しかし、既にみたように、子ども「私」の名で覆い隠そうとしても、そういう答えは既に『ミッシェルの口紅』の執筆の時期にはできていたと考えられる。

人間の回復——上海体験を語る意味

上海は当時の日本人にとってはどのような場所だろうか。まずは経済都市としての上海だ。短編「群がる街」にはこういう説明がある。

そのころ、一九三〇年代は世界的な経済恐慌の時代といわれている。日本内地には失業者が溢れ、上海に向けて、独り身の女たちが大勢出稼ぎにきていた。(中略) 東北地方の農家の娘たちは、貧しさのために都会に売られたというが、娘たちが金に替えられるのは、日本内地ばかりではない。(中略) 拡大されていく日中戦争の戸端口にあたる上海は、一か八かの、活気ある稼ぎ場でもあったらしい。男も女も子供も、雑多な国の人たちが、開運を期待して上海の街に群がっていた。ドル買いと称する男たちも、日本から上海へ

やってきました。

少女時代の上海体験を語る作品であっても、決して子どもの小さい視線に拘らなく、時代性の強い世界を表象する。重い時代背景に暮らした人々に目を注ぐのは林の文学の特徴だと言ってよからう。

三十年代の世界大恐慌と凶作の重なった不況の中、日本において人々の生存が困難になった。更に、大日本帝国の軍国主義が膨張しつつ、軍事的手段として、三一年の「九・一八事変」をはじめとする一連の対華侵略が行われた。それを出発点にして、アジア・太平洋全範囲を国の「生存圏」に収めようとした。一九三八年の国家総動員法のもとで、大日本帝国の内外における動員が行わる。働く機会や場所を求めて、多くの日本人は国内外に移動した。橋谷弘氏は、日本の植民地支配について、「民間人」も含めて「本土人が多かった」という特徴を指摘している²⁹⁾。虹口は正式の植民地でも租界でもなかったが、上海事変を契機に事実上、日本軍の占領下に置かれた。ここに住んでいた人は、軍人、支配者、商社の人の他、最も多いのは日本本土で窮迫し、生活の道を探しに来た人々だった。大恐慌と凶作に加えて、戦時統制による物資欠乏と思想統制が強いられた日本本土と比べて、上海での生活は割に豊かだったが、それは上海に対する日本の侵略がもたらしたものだ。

その時期に、国と国民の「生存圏」を建設するためにアジア太平洋に進出する大日本帝国は、日本本土から日本国民を動員した。海を渡れば準社員や社員になることができ、不況になった日本の生活から脱出できると宣伝され、海の向こう岸にある上海は、まるで「理想郷」のように形容された。作品集『ミッシェルの口紅』で登場する日本人たちもそれぞれ自分の「理想」を抱えて上海に赴いたのだが、実際は必ずしも期待された通りに鮮やかな生活を送るのではなく、むしろ生活の破綻が明らかになった。

「群がる街」では、ヤアチイの家で娼婦をやった日本人の女が、首吊り自殺をした。「私」の父方の血縁の男が東シナ海と揚子江の境界域で入水自殺した。このような男女たちは、経済恐慌に襲われた日本内地から「活気ある稼ぎ場」と言われた上海に移り住んで生存の道を求めたが、結局屈辱と貧困の中で死んでいったのだ。作品に描かれたそれらの「顔がない」人たちは群がって、上海の背景を構成した。「群がる街」はその人たちの物語を語ることで、上海の繁栄の下に隠される生存の真相をさらけ出している。

作中の上海は理想の破滅の場所でもある。「はなのなかの道」では、「故郷を捨てた甲斐はなに？」と尋ねられると、梶山は「大東亜共栄」と真面目に答え「た。しかし、「大東亜共栄」の夢を抱えていた彼は商社のために物資の調達をする仕事しかできず、戦時中に留守宅に侵入して戦火を避けたり、戦乱の中に工場から製品を盗んだり、得体の知れない人たちと付き合うような生活を送っていた。第二次上海事変の際、梶山が紡績工場から布を持ち出し、「戦利品」として略奪した品物を「私」の家の押入れに置いた。それを知った「私」の母は梶山を庇って、布を「暗くなるのを待って、部屋の隅で裁断」して、一刻も早く使い切ろうとした（「はなのなかの道」）。

母は日本人としてのプライドの高い人で、「日本婦人の恥」にならないように、「身に危険を感じる」時に「殺された場合の死体の乱れを考えて下着を取り換える」（「老婆の路地」）ことまで注意を払う人だ。このような母が、品物を盗むという「犯罪行為」を庇うようになった理由を考えると、母の観念の中の「恥」は、個人の「恥」ではなく、「日本婦人の恥」故にほかならない。

一九三七年の盧溝橋事件を契機に、日中の衝突が全面戦争に拡大すると、大日本帝国政府は国民精神総動員運動を開始した。青年団、婦人団体をはじめ各種の団体を総動員して、戦争に協力する活動が推進された。短編「耕地」の中で、母たち国防婦人会員が、戦場に赴く日

本兵士を見送り、番茶とにぎり飯を配るシーンが描かれている。その国防婦人会というと、それは一九三二年に組織された女性団体で、それに先立って組織されていた愛国婦人会、婦選獲得同盟に対して、日本本土や植民地の主婦、労働婦人、職業婦人、更には芸娼妓など、もう一段下の階層の女性が多く参加していた団体だ。会員たちが「トリードマークの割烹着と襷を身につけて、駅や港で出征兵士の見送り」と茶菓などの世話をした³⁰⁾という現象について、大門正克は「国防婦人会の活動を通じて、家事生活と軍事・政治が明瞭に結びつけられた³¹⁾と指摘している。婦人会は女性が国に尽くすという信念を実行する便宜を提供するため、女性が実際に戦争に参加することを促し、戦時の国民の集団意識と同調性を固めることにも貢献したのだ。その背景を念頭に置けば、母が梶山の罪を庇って布を最後まで使い切るのは、相手が自分と同じく日本人だったからで、「日本人」という集団の罪を隠すためにほかならない。

それに、梶山が布を盗むことを「犯罪行為」と称したのは、平和時代の法律によるものだ。「三光作戦（焼き、殺し、奪う）」が象徴する日本の中国侵略が行われていたその時期は、軍隊外でも「略奪」や「徴発」など、平和の時代では必要のない言葉が日常的に使われるようになった。そうした戦時では、中国の法律の拘束力が弱くなる。列強の国民は治外法権に保護され、法律は飾り物に過ぎない。この無秩序の時期、平民の生活も常にグレーゾーンに置かれるようになった。不本意に布を受けた母は負担を感じながらも、早く布を使い切ろうとした。悪いと分かっていたが、罪を隠そうとすればするほど、そのことを最後まで遂行せざるを得なかったのだ。国民総動員による集団意識によって自分と同じく日本人だった梶山の罪を庇うとか、戦時下のグレーゾーンの生き方とか、その理由はいくつか考えられる。何より、大義名分と比較して、半間幅の押入れに詰まった白布のほうがより生活の助けとなる実用的なものだ。

「大東亜共栄」の理想を抱えて上海に赴いた梶山も、国に尽くそうとして婦人会に参加した母も、国のために貢献しようとする心を持っていたが、その心は戦争に利用された。戦時下の日本人たちは様々に宣伝された理想を持っていたが、生活の中で略奪、窃盗に巻き込まれ、その大義名分は事実上破壊された。作中の「私」は、子どもだから接した世界は狭いが、身の回りの人々の眼差しを借りることで、政治的、経済的に時代に巻き込まれた庶民の世界をより客観的に描けるようになる。上海の一般人をめぐる語り自体が、庶民が主体だった歴史を語ることだ。それゆえ、上海時代の林は子どもながら、「歴史の証言者」³²⁾とも考えられている。彼女が庶民の歴史の証言を「ありのまま」に語ることで、戦時下の庶民に吹き込まれた「稼ぎ場」上海と「大東亜共栄」の嘘をさらけ出した。林は『ミッシェルの口紅』において、感性を控える語りをもって、戦争が人々の生活、尊厳や命を奪うという本質を描き尽くしたのだ。

しかし皮肉なことに、上層者の視点では、これらの在中日本人は「日本国民性」に「欠陥」があり、「聖戦目的」を正しく理解していない「素質低劣ナル下級者」に過ぎない³³⁾。作者が意図していたか否かとは別に、作品において、上位者に利用され、差別的に扱われた、離島に排除された在中日本人の群像、またはその共同体の中で、個の生が無視されたということが色濃く滲んできた。それは、林の創作方法を考えれば必然的なものとも言える。

そして、それは作者自らの原爆体験とも関係していると思われる。一九四五年に上海から引き揚げた後、林は三菱兵器工場に学徒動員中、被爆した。その後の人生を、彼女は被爆者という強いられた立場の元に過ごした。デビュー作『祭りの場』には、自分が死亡すれば国が出す一万六千円の葬祭料を計算する挿話がある。その葬祭料で葬場の飾りを買えば、「チューリップ」なら「八十本」、「大根」なら「五十三本」が買えるという³⁴⁾。林は即物的な数字の計算をもって、人間の生

は政治の中では軽い数字に凝縮された存在であるということを皮肉に語った。上海の風景に馴染み、日本人の子どもとして中国人と生活を共有する少女時代の林には、いつか被爆者となって余生を過ごす予想はまだない。しかし、歴史の中に、膨大な数の人間の生が潜んでいたが、彼らは公式の歴史から排除された。戦争、疫病、災難、貧しさや刑罰の中で、彼らは騒いだが、地位が低く、軽蔑された彼らは、せいぜい数字に凝縮され、史書に陳列された冷たい情報になり、その活字の行間で人間としての含意が除去されてしまう。国に「特別被爆者」と明記され、「一万六千円」をもって軽々しく対処された林は上海時代を生きた人々と重なる部分があると感じている。命が脅かされ、個体としての生の尊厳を失った戦時下の人々には庶民自らの語りが必要だという潜在意識をもって、林は庶民の歴史を書いて、庶民が主体となる記録を試みたと考えられる。それは『ミッシェルの口紅』に描いた上海体験に、はつきり現れている。

おわりに

本論では、『ミッシェルの口紅』における黄浦江の上の風景や、路地での庶民生活から上海時代の表象を考察して、林京子の認識の中の上海を確認した。まず、飲用水を提供し、死体を葬る黄浦江は、上海の生と死が集中的で直接に見られる場所であることを確認した。四季により色の転換が富んでいる水源地と死体が日常的に流れ着くイメージを特徴とする黄浦江の描写を分析することで、林が、上海の風土への愛着により上海に対する帰属感をもっていたことと、上海の風景の影響を受けて、死を自然のものと考える認識ができることを明らかにした。

次に、日本占領下の上海では、中国人の生は生物的な生に降格されたことを明らかにした。中国側の政府の権力が届かない上海では、中

国人は法的権利を失った。更には租界の建築により地理的景観が変わることで、故郷を失い、日本軍に「合理的」に処刑される存在となったため、その生は剥ぎ出しのものになってしまう。そして、路地の生活を分析することで、上海は、日本人と中国人の庶民の生活が互いに浸透しながらも、占領国と被占領国、支配者と被支配者の意識が強く人々に存在する場所だったことが分かる。最後に、日本人の庶民にとつての上海は、「活気ある稼ぎ場」「理想郷」と信じられたが、実際には理想と生活が破滅する地、戦争の前線だということを確認した。

『ミッシェルの口紅』の林は、子どもの「私」、書く時点の「私」と他人の視点を含める重層的な視線を利用して、主観的であると同時に客観的な語りを行った。子どもの「私」は少女時代を懐かしむ作者の代弁者だが、回想する大人の視線は距離感のある中立的な立場を作り出している。黄浦江の傍で身につけた即物的な語りをもって、林は上海時代の記憶の断片を記録した。人生の「プラス」部分を想起することと戦時の上海を記録することとの矛盾を調和させるための手法として、子どもの目を借りてありのまま書くことを選んだのだ。そこに上海時代を美化する意図はない。むしろ戦時下の人間の生の降格を意識して語り、更には個の生に向かうことで人間としての生の意味を取り戻そうとした。そして、個の生に向かうとき、日本人の中国人に対する圧迫を自覚して自省を生じ、また戦時総動員中の日本人の嘆かわしさと滑稽さをさらけ出した。

林の超然たる眼差しと冷静な語りは、戦場だった中国の原風景から得たものだ。また、被爆体験は、被爆していない少女への懐かしさと原爆者に強いられた体験という点で、上海時代の語りを要請した。重い時代の中で顔のない意味のない数字として表象された群衆が、自らの声を出発する。それが『ミッシェルの口紅』の意義だ。

【注】

- 1) 林京子・島村輝『被爆を生きて―作品と生涯を語る―』岩波書店、二〇一一年、四頁。
- 2) 林京子『上海と八月九日と私』『林京子全集』第七巻、日本図書センター、二〇〇五年、二四三―二四四頁。
- 3) 川西政明「解説」『林京子全集』第二巻、日本図書センター、二〇〇五年、四七一頁。
- 4) 黒古一夫『近現代作家論集 大江健三郎論 林京子論』アーツアンドクラフツ、二〇一九年、二七三頁、二七五頁。
- 5) 同上、二六七頁。
- 6) 熊芳『林京子の文学―戦争と核の時代を生きる―』インパクト出版社、二〇一八年、三二頁。
- 7) 同上、二六頁。
- 8) 林京子『著者から読者へ』上海 ミッシェルの口紅』講談社文芸文庫、二〇〇一年、四一六頁。
- 9) 林京子・島村輝『被爆を生きて―作品と生涯を語る―』岩波書店、二〇一一年、七頁。
- 10) 林京子『あとがき』『林京子全集』第一巻、日本図書センター、二〇〇五年、四七四頁。
- 11) 林京子、小谷一明、喜納育江「インタビュー 文学と核の接触領域」谷一明、巴山岳人、結城正美、豊里真弓、喜納育江編『文学から環境を考える エコクリティシズムガイドブック』勉誠出版、二〇一四年、五二頁。
- 12) 熊芳、前掲書、二二二頁。
- 13) 林京子・島村輝、前掲書、六頁。
- 14) 例えば、「川といたら私がイメージするのは三本「川」ではなく「河」。どっぷり流れる褐色の黄浦江。中国大陸が私の日本語の母体になっているんです」（林京子・島村輝、前掲書、七頁）と「私が思う川は河で、どっぷり流れる黄浦江だった」（林京子『上海』『林京子全集』第二巻、日本図書センター、二〇〇五年、一五九頁）という表現があり、「風土と言葉というのは関係が深いものだと思っておりまして、私は日本語をしゃべっているつもりなんですけれども、少しずつ日本の方たちの風光明媚な風景に育まれた日本語と、私が使う日本語の内容はちょっと違っているかと思います。これは、中国大陸の広さはやはり「白髪三千丈」というような言葉でなければ対抗できないほどの大きなものでして、人がいかに大陸の大きさ、自然の大きさに対して小さいかということ、言葉も少しずつ膨らんでくるのかな、内容も膨らんでくるのかなという気がいたします」（林京子『上海と八月九日と私』『林京子全集』第七巻、日本図書センター、二〇〇五年、二四七頁）という説明がある。
- 15) 大谷華「場所と個人の情動的なつながり―場所愛着、場所アイデンティティ、場所感覚」『環境心理学研究』一巻一号、日本環境心理学会、二〇一三年、六〇頁。
- 16) 林京子、野呂邦暢「対談 昭和二〇年八月九日 芥川賞受賞作『祭り』の場」をめぐって』『文学界』一九七五年九月号、文藝春秋、一六九頁。
- 17) 小谷一明「林京子論 即物的に語り続けた理由」『環境人文学』文化のなかの自然』野田研一・山本洋平・森田糸太郎編集、勉誠出版、二〇一七年、九九頁。
- 18) 原佑介「禁じられた郷愁―小林勝の戦後文学と朝鮮―」新幹社、二〇一九年、一〇六頁。
- 19) 石田仁志「林京子―異郷・故郷としての上海・『ミッシェルの口紅』上海」『異郷』としての大連・上海・台北』勉誠出版、二〇一五年、二九六頁。
- 20) 藤原恵洋『上海―疾走する近代都市』講談社現代新書、一九八八年、二六頁。
- 21) 吉見義明『草の根のファシズム』東京大学出版会、一九八七年、二四三頁。

- 22) 同上、二四四頁。
- 23) 林京子『上海』『林京子全集』第二卷、日本図書センター、二〇〇五年、二二三頁。
- 24) 林京子『ミッシェルの口紅』『林京子全集』第二卷、日本図書センター、二〇〇五年、二六頁。
- 25) 大本営陸軍部研究班「海外地邦人の言動より観たる国民教育資料(案)」一九四〇年、高崎隆治編『十五年戦争極秘資料集』第一卷、不二出版、一九八七年、八六頁、一八五頁。
- 26) 吉見義明、前掲書、一〇三頁。
- 27) 林京子「仮面」『群像』一九九七年七月号、『林京子全集』第六卷、日本図書センター、二〇〇五年所収、二〇七頁。
- 28) 林京子「あとがき」『林京子全集』第二卷、日本図書センター、二〇〇五年、四六五頁。
- 29) 橋谷弘『帝国日本と植民地都市』吉川弘文館、二〇〇四年を参照した。
- 30) 大門正克『戦争と戦後を生きる』小学館、二〇〇九年、五八頁。
- 31) 同上、五九頁。
- 32) 渡邊澄子・スリアーノ・マヌエラ『林京子―人と文学―』勉城出版、二〇〇九年、九〇頁。
- 33) 大本営陸軍部研究班、前掲書を参照した。
- 34) 林京子『祭りの場』『林京子全集』第一卷、日本図書センター、二〇〇五年、四八頁。

人間社会環境研究

第 43 号

Archetypal Landscape of Hayashi Kyoko's Story:
Shanghai in *Michel's Lipstick*

SONG WEI

2022年3月

金沢大学大学院人間社会環境研究科